



特255

287

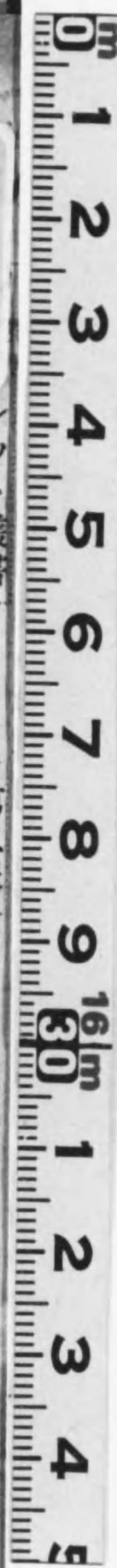
レツト叢書

第二輯

とことかじり
十言の神呪
天照大御神の大御名

周防國石城山

發行 居行天道神



始



特 255
28.7

天照大神の大豫言

天照大神。勅皇孫曰。豐葦原千五百
秋之瑞穗國。是吾子孫可王之地。宜
爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆。當
與天壤無窮者矣。

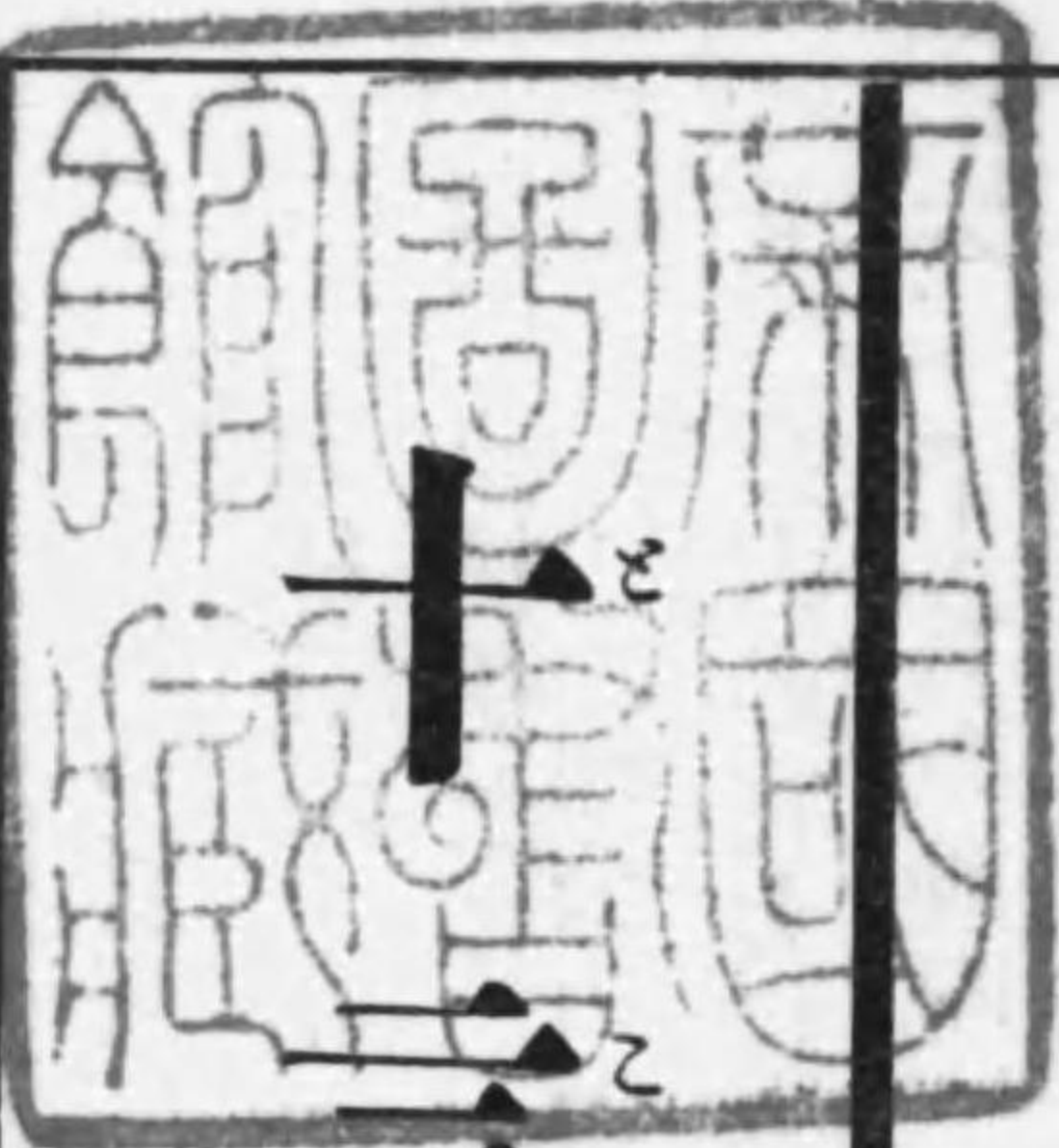
(日本紀)

豐葦原千五百秋之瑞穗國とは今の日本國土のみにあ
らず我が地球上の總ての國土を意味す

天行居パンフレット叢書

第二輯

發行所寄贈本



十言の神呪



大日本周防國石城山麓 神道天行居 發行

十言の神呪

目次

- 一、敬神尊皇と信教の自由……………(一)
- 二、『十言の神呪』とは？……………(五)
- 三、大楠公の『十言の神呪』奉唱……………(九)
- 四、望楠學派と『十言の神呪』
▽楠公の神呪奉唱と竹内式部先生の奉公心得書……………(二)
- 五、皇大神宮大講義山口大人の『十言の神呪奉唱論』……………(三)
- 六、『十言の神呪』と稱名念佛……………(四)
- 七、稱名念佛と阿彌陀佛の由來……………(六)
- 八、天照大御神は實在神……………(六)

- 九、理神の名を稱へて何故靈驗が現はれるか……………(七)
- 十、宇宙は音と數との交錯・數を重ねることの祕義……………(三)
- 十一、『十言の神呪』は妖魔撃攘の祕唱……………(四)
- 十二、神名の祕義……………(三)
- 十三、『結靈の時』……………(七)
- 十四、『結靈の時』の靈驗……………(三)
- 十五、八百萬神の神呪奉唱……………(三)
- 十六、全國同志の神呪奉唱……………(三)
- 十七、『十言の神呪』は小學校より……………(七)
- 十八、非常時局と『十言の神呪』……………(七)

はしがき

此の小冊子は神道天行居の出版物の中から『十言の神呪』に関する記事を抄録して編輯したものであります。

『十言の神呪』とは幽顯兩界の主宰神にして皇祖にまします天照大御神様の大御名でありまして、アマテラスオホミカミで十言でありますから、『十言の神呪』と申上げて居るのであります。

『十言の神呪』は至尊至貴の大神様の御神名であると同時に靈妙不可測なる神呪で、日々夜々至心に神呪を奉唱すればその功德は、無量無邊であります。私ども同志のものは毎日一定の時刻に一定時間、同志一堂に會するといふ觀念のもとに神呪を奉唱して

(一)皇室の御安泰、彌榮のため

(二)國力の充實、國威の發揚のため

(三)幽顯兩界の生類が正義に反省歸順せんがため

(四)同志相互の清潔なる幸福のため

に熱禱して居るのであります。私どもは地上の妖雲を祓除して天照らします日の大神の御裔にまします皇孫命の御稜威を、四方の國々に射照り徹らしめるために全日本の神孫が『十言の神呪』を奉唱せられんことを切願するものであります。

大日本臣道の精華大楠公の昇天より六百年にして、大楠公が日夕修唱せられた『十言の神呪』に關する此の小編を上木して天下士人の眞面目なる考慮に懇へるのも自らなる時節の到來であります。

十言の神呪

天照大御神の大御名

神道天行居編

一、敬神尊皇と信教の自由

客「あなたは神様を祀つて居られるやうですが、何か教會でもおやりになつて居ますか。」

對「いや、私は日本臣民として祖國の神々を祀り又た人類の一員として、地球上の一切萬物に恩顧を垂れ給ふ大神達をお祭りして居るに過ぎません。あなたの家の神棚と同じ性質のもです。」

客「私の家の神棚などはホンの物置棚と同様で一年中埃だらけで櫛の青いのは正月だけです。それに神様を祭ると言つても伊勢の大麻は子供が學校から受けて來たのだし、その他に産土様の御神符は昨年の暮に頒つて來たのを家内が納めたとか聞いて居るだけで神棚とは名のみです。ところがあなたの家のは簾を垂れ七五三繩を張り堂々たるものですが、一體何神様をお祭りですか。」

對「天照大御神様を始め産土大神様其の他天地八百萬の神々です。以前は來る人毎に何神様かたづねられるのがウルサイので『御祭神天照大神を始め奉り歴代皇孫命』と書いて貼付けて居りましたが、それも餘計な事だと思つて除りましたやうな譯です。」

客「それは一應誰でも尋ねますよ。やはり以前のやうに説明して置かれた方がよいでせう。」

對「併し、あなたの家でも神棚に御祭神の名を書いて貼つてないやうに私もその必要を認めないのです。そして質問者には、神國民であるから神様を祀つて居ると答へて居ります。元來大部分の日本人が神棚を極めて粗末にして居るのは奇怪な現象で、その癖に佛壇だけはピカ／＼光らして居るのは甚だ不快な現象ですね。」

客「それは日本は佛教徒が大多数で……それに佛壇には家人に最も近い先祖の御靈が祀つてあり、又た如來なり祖師なりを同殿にお祀りして居るので自然親みが深いからだと思ひます。それでも

基督教の或る派の如くエホバ一神より拜まぬといふのより——型ばかりにしても、埃にまみれて居ても——絶対に拜まぬといふのよりもよいではありませんか。」

對「日本人の癖に祖國の神を敬拜することを拒否するが如きは言語道斷であります。それは單に耶蘇の一派に限つたことでなく佛教に於てもその篤信者の自然な氣持を洗つて見るとその種の傾向のあることは否定することができないのみならず、佛教の中の、或る派の如きは公然とは申しませんが所謂他神を祀ることを忌み嫌ふのがあります。これは異つた系統の信仰の對象を同時に二つ以上持つことの出來ない人間本來の性質から來るのであります。それで如何に本地垂迹説を振り廻しても、神と佛とを總てに於て同じやうに敬信するといふことは出來難い事情がありまして、たゞ本が同じだからどちらを信じても不都合はなからうといふ安心に役立つだけではありません。」

そこで敬神崇佛などいふ言葉も使はれますが、敬と崇とを信仰上にどう表現するかと訊ねられたら此の説明は非常に困難であらうと思ひます。……兎に角、日本人は先づ第一番に神祇を崇敬するといふことを國民的義務とすべきだと思ひます。」

客「しかしそれは信仰といふことの性質上出來難いことです。そこで憲法に於ても信教は自由であ

ることに定めてあると思ひます。」

對「憲法第二十八條の『信教ノ自由』といふ問題については、先年耶蘇學校の神社參拜拒否問題から多數の識者學人によつて論議せられ大體落ち着く所に落ち着いて居るやうでありますから、茲で私が申上げる迄も無いと思ひますが、神社は公的なものでありますから、私的信仰上の理由から神社に參拜するのを異端視するのは不都合極まる非國民であります。大日本國は天津神に始まり——世界萬國もさうであります——天照大御神様の御正統が、大日本天皇陛下にましまし、全國津々浦々に鎮まり給ふ八百萬の神々は天照大御神様の御統制の下に組織的に活動して居られます。それで、恐らくも上御一人に於かせられましては伊勢神宮を始め奉り官國幣社を御親拜あらせられ、又は勅使を差遣せられて幣帛を奉らせ給ふのであります。

一般の人は御存知ないかも知れませんが陛下は御旬祭と申上げて月に三度必ず宮中三殿を御親拜あらせ給ふのであります。これは決して天子様御自身の御信仰によるのではなくマツリゴトとして拜し給ふのであります。私ども草莽卑賤の微臣が、上御一人の拜し給ふ神々を拜することが出来るといふのは、これだけでも限りなき感激を覚えざるを得ないではありませんか。

上は、天皇陛下より下は賤の男賤の女に至る迄皇大神宮を始め奉り天地八百萬の神々を拜み奉

る國風と申すものは實に美しく清々しく、これだけでも神國中の神國として世界に冠たるものではないでしょうか。」

客「さう言はれると月に一回の神拜みもしない私などは眞に恥かしい次第で、どうやら非國民の隣り位のところかも知れませんが、これからは是非神社にも參拜し又た毎朝拜神もしたいと思ひますが、拜神の形式、神道の修法といふやうなものを少し教授していただけないでしょうか。」

對「形式と申ししても別段むつかしいものではなく普通に神社で行つて居ります祭式に準じてやればよい譯で祝詞の如きも折本仕立のものを何處の書店でも賣つて居りますから、それによつて至誠を以て奏上されたら宜しい譯です。修法には音靈法、鎮魂法、歸神法といろ／＼ありますがそれらの中には猥りに傳へ難い事情のものもありますから、修法としては『十言の神咒』をお勧めいたします。」

一、『十言の神咒』とは？

客「『十言の神咒』と申しますのは、何ういふわけのものですか。」

對「アマテラスオホミカミで十言であります。この十言の御神名を幾百千萬回と連続して修誦す

ることです。それきりのことでもあります。實はこの十言は御神名であつて同時に奇靈極まる神咒なので餘りにも平易なことでもありますから、信うすきものが軽々しく思ひなして冥罰を蒙らんとを懼れ、年久しく雲霧に遮蔽されて居たのを、幸ひにこれを秘しかくして居たのであります。が、去る昭和三年始めて神道天行居道場（天行居については『石城山と天行居』を参照せられたし）に於て篤信の同志に傳へたのがその始めであります。

それは今日及び今日以後の非常時の入口が昭和三年頃であるといふ認識のもとに斷然意を決して此の至平易の修法——神祕とも神祕なる大祝言の一つを惜しげもなく傳へたのであります。元來今日、非常時々と騒いで居りますけれども、蝶螺の非常時は魚屋の臺の上で蓋を開けて見た時に始まるのでなく網が海に下されつゝある時に非常時は始まつて居るのであります。たゞ視野の短小な人間にはそれが容易に解らないだけであります。

客「それはあなた方が後から考へついで先見の明を押賣りすると言はれても辯解の辭がないではありませんか。」

對「その事は當時の出版物の隨所に出て居りますから、一見さるれば解ることではありますが、今日の非常時の進行時代にそんなことはどうでもよいことでもあります。實は今日以後の非常時は有史

以來未曾有の非常時で、あなた方が頻りに主張してをられる所謂一九三五—六年の危局といふものを、神と人との協力警戒によつて無事に通過したとしても、非常時は依然として残つて居りますので、こゝに十言の神咒を全日本人に向つて提唱しなければならぬのであります。」

客「しかし私としては『十言の神咒』などいふことは始めて聞くことで、忌憚なく申せば念佛とかお題目とか南無大師遍照金剛とかから思ひ付いての、あなた方の教會式方便ではないかといふ氣がしてならんのですが……。」

對「それは今日の多くの人の考への落ち着く所だらうと思ひます。南無阿彌陀佛と稱へることが念佛なら、アマテラスオホミカミと唱へることは念神でありましてその形式は同一であります。世の中には廂を貸して母家を取られるといふことがあります。日本の神法、古傳説と外國のそれとを比較する人々とはかく現實關係ばかりを見て過去の關係も同様であつたらうと推定したがります。また或る種の人は或る事柄の起源が東西同時に而して別々であつたとしても、とかく外國を先にして自國を後にするといふ謙遜徳を持ち合せて居ります。

神咒といふことにつきましては、日本書紀（神武紀）に『夢に天神有り訓へまつりけらく、宜しく天の香山の土を取り、天の平瓮八十枚を造り嚴瓮を

併せ造りて天神地祇を敬ひ祭り、亦た嚴の呪詛を爲よ、かくせば虜おのづから平伏ひなむ。』
 ともありますやうに神代からの傳へのものであります。また紀の一書に經津主神のことを『このとき齋主神を齋之大人と號す、此神いま東國、楳取の地に在す。』とあります。楳取といふのも實は神代から申しますので經津主神は神劍の御靈にますと同時に、天上に於ける神呪の神で齋主神といふ御神名を負ひ給ふのもそれから申すことで、神呪といふことは佛教から得たヒントによつて勝手にでつちあげたものではありません。』

客「さういふ解釋を承るのは始めてですが、その他に皇典上に神呪に就ての記録がありますか。」
 對「その外には日本書紀欽明天皇二十三年の條に、馬飼首歌依の子守石と中瀬氷とを獄吏が捕へて罪に行はんとする時の記事に

將に火中に投れむとして、呪りて曰く吾が手もちて投るゝに非ず。祝の手を以て投るゝなり。呪り詠りて火に投れむと欲す。守石が母祈み請して曰く、兒を火の裏に投れなば、天の災果して臻らむ、請ふ祝人に付けて神奴と作らしめよ。乃ち母の請すに依りて、許して神奴に没る

と記してある外には見當らぬやうであります。此の場合のカジリはどういふ呪言を唱へたか明瞭

を缺いで居りますが、當時呪言を唱へるかじりびとなるものがあつたことは明らかであります。神呪は災禍や虜を攘ひのける祈願の呪言でありますが、就中、十言の神呪と申すのは、神呪であると共に至尊至貴の大神に呼びかける言葉であります。従つて十言の神呪は妖魔撃攘、叛徒平定等の一朝有事の際ばかりでなくあらゆる場合にこの大御名を奉唱することによつて無量の神徳を蒙るものであります。かの大日本忠臣の龜鑑たる大楠公も實は熱心な十言の神呪の奉唱者でありました。』

三、大楠公の『十言の神呪』奉唱

客「大楠公が 天照大御神の御名奉唱を提唱されたことは楠家傳七卷書にも書いてありますが、該書は偽書として有名なもので、それに楠公は熱心な佛教信者であつたとも聞いて居りますから少し變だと思ひますけれども……。」

對「そこが大楠公の大楠公たるところで、佛徒であらうと耶蘇教徒であらうと、天朝の御爲には何時でも一命を捧げ奉るべきでありまして、大義名分の暗黒時代に河内の一土豪の身を以て菊水の織ひるがへし錦旗の下に馳せ参じた大楠公が佛教の死生觀に悟入して尙ほ常に 天照大御神の十

言の神呪を奉唱されたことはさもあるべきことであります。又た偽書といふ以上は幾らか眞實も傳へて居なければ偽書とは云はれません。ピンからキリ迄似てもつかぬものであれば、それは新なる別の著述である譯です。楠家傳何々といふ偽書も相當坊間にあります。作偽巧の結集であると極めてかゝる必要もない譯で、大楠公の十言の神呪奉唱の如きも雲間の片鱗を傳へて居るものと思はれます。」

客「雲間の片鱗では承知出来かねますが、もつと確實な據りどころはないのですか。」

對「ないことはありません。けれども抑々、楠木正成公に對する往時の認識といふものは決して今日のやうなものでなく戰國時代頃の天朝の御記録では救勸の身分といふことになつて居たさうであります。徳川時代も末期近くに至る迄は忠君精神といふものが稀薄であつたのみならず、幕府としても吉野朝の忠臣を賞恤することを欲しなかつた等の關係から忠臣に對してよりも武將の武略を憧憬するといふやうな風潮で、殊に武人はいかにして源家の末なることを偽らんかと苦心したのであります。楠氏などは一般から歡迎された譯ではないのです。そのために楠公の御事蹟などは餘り深く研究されなかつたのであります。徳川の屋臺骨が朽ちかける頃から楠公熱が旺んになつて來ました。」

四、望楠學派と『十言の神呪』

▽楠公の神呪奉唱と竹内式部先生の奉公心得書

こゝで徳川時代に於ける日本の思想傾向に就て一言したいのですが、話がだん／＼枝葉に入つて行くやうですから大楠公が十言の神呪を奉唱されたことを、望楠學派の思想、言行、文獻によつて證據立てたいと思ひます。」

客「望楠學派とは何ですか。」

對「それは、山崎闇齋先生の所謂崎門學派の逸足たる淺見綱齋先生が大楠公の忠烈に感奮してその塾を望楠書院と號せられたのでその學派を望楠學派と申しまして、その高足若林強齋先生の慷慨激越なる士人的教育によつて幾多の志士をその學派から出して居ります。」

この學派に直接間接に關係ある人は三宅觀瀾、山本復齋、西依墨山、古賀精里、古賀侗菴、古賀茶溪、齋藤竹堂、竹内式部、山縣大貳、藤井右門、頼山陽、頼三樹、梅田雲濱、橋本左内、西條成齋、小野鶴山、有馬新七、平田篤胤の諸先生其他多數に上つて居ります。綱齋先生の歸幽後望楠書院の塾頭として諸生を教授し大楠公の精神を鼓吹し、山河悉く眠るが如き京師に於て皇

道のために萬丈の氣を吐いたのが若林強齋先生であります。當時先生の門人に山口春水なるものがありまして或日先生に對ひ

近頃世にも有り難いことを聞きました。山本主馬の申すところによりますと、賀茂の藏書の中に楠公の書がありまして、それには楠公の御言葉に

『假りにも君を怨み奉る心起り候はゞ 天照大神の御名を唱へ奉るべし。』

と仰せられたことが記してあるさうで御座います。と申しました。これを聞いて先生の感激限りなく、後にその書を手に入れられて春水に向ひ我國人臣の目當にすべき事は實に此の楠氏の一語の外にはない。自分は此の言葉を生涯の身を守りとするに決めた。

と申されたといふことです。

竹内式部先生は強齋先生の門人松岡仲良及び玉木葦齋先生に就て學び遂に實曆事件を起し明和事件にも連座した尊皇斥霸の先驅者であります。常に皇室の御衰微を慨いて堂上公卿縉紳の間に出入して『日本書紀』『靖獻遺言』等を講述されました。就中、先生が堂上の門人に示された『奉公心得書』は實に立論堂々たるものであります。特に大楠公が

『天照大神の御名を唱ふべし。』

と仰せられたことを臣子奉公の經典とせられたことは、その忠肝義膽まことに日月と光りを争ふものがあるではありませんか。』

五、皇大神宮大講義山口大人の『十言の神咒』奉唱論

客「十言の神咒と大楠公との關係はわかりましたが、それほど至重至秘にして平易なる大法がどうして伊勢の皇大神宮に傳はらなかつたのでせうか。」

對「その邊のことは私にも分りませんが、中つ世に於ける神宮に對し奉る朝廷の尊崇及び一般の崇敬といふものは今日のそれとは餘程違つて居りまして朝廷から位階をお授けになつた事もあり、又た僧尼の徒が神宮を占據したこともあり、又た彼等によつて神宮の修築が行はれたことでもありますやうな譯で、高く遠き御神慮により或る神人によつて此の大法も受け繼がれて來たものと思はれます。今日神宮には十言の神咒についての所傳はないやうでありますけれども、かの『神判記實』の撰述者たる皇大神宮主典兼大講義山口起業大人はその『神典採要通解』卷之一に次のやうに述べて居られます。

○天照は、高天原に神留り坐して、天地四方神人事物を主宰し、照臨の神德至らざる無きの義なり。皇大神は統大神の義なり。宇宙を統べて萬神の德を合せ玉ふの意に由る。

○此の大神の神德を仰ぎ敬恭肅拜するに、必ず此の大神を稱ふべし。若し過ちて諸々の惡念を萌さば此の大神を稱ふべし。若し諸々の善念を發せば此の大神を稱ふべし。若し諸々の幸福を得ば此の大神を稱ふべし。若し諸々の災厄を蒙るときは此の大神を稱ふべし。能く此の如く心に誠に此の大神を稱ふる時は惡念は忽ち消して善志に移り、善念は愈々張りて行ひを遂げ幸福は益々大いにして子孫に傳へ、災厄は變改して福祥となり、終身服膺して此の如くなれば命終の後、必ず高天原に歸して、無量の福社を受け、其德九族に延きて共に娛樂を蒙ること更に疑ひなき所なり。神典を拜讀するの實理眞要此義に達するを以て第一の深奥とす。……」

六、『十言の神咒』と稱名念佛

客「さう伺つて見ますと随分大切な修法のやうですが、どうも私には念佛の方が自然的でよいやうに思はれます。それ許りでなく古來念佛の修業によつて靈眼を開いたものもありますから『落つ

れば同じ谷川の水」といふ次第のもので神咒も念佛も言葉こそ違へ同じ形式のもので同じ處に落ち着くのではありませんか。」

對「あなたのやうに同じ處を行つたり戻つたりする人にどれほど話しても際限がありません。私共は最も正しい事を總ての日本人に知らしめなければならぬといふので古傳を力説して居りますけれども、それでも尚ほ念佛が好きだ、アーメンがよいと言ふ人をどうすることも出来ません。たゞ私共は全日本人の直日の靈に訴へるだけのことです。併し神咒と念佛其の他の稱名は言葉が異なるやうに言葉が違ひますからその修誦の結果も全く違ひます。形式に類似の點があるからといふ理由で、天祖と如來とを同一視するといふ事になれば國體論、君主論に於ても非常に危険な結論に到達しなければならぬと思ひます。世の中には學問の自由と稱するものがあつて不逞なる天皇論を振り廻して居る輩もありますけれども、事實は事實、理論は理論であります。」

客「併し本來、理論と事實とは符合すべきもので事實に反する理論はほんたうの理論ではありません。」

對「さう話がわかつて居れば世話はないのでありますが、實際問題としてはウソの理論が平氣で横行して居るから地上に罪や穢れが起きて來るのです。相似點の多いものを一括して事物を分類す

ることは學問上の便宜で結構であります。それも物と事によりけりで逆に分類上から國家を論ずることになると内外國の區別がなくなつてしまひます。

話がそれかけましたが神咒は實在の大神即ち幽顯兩界の主宰神たる天照大御神様の御名を唱へるのであります。念佛の如く人間の思想上の産物たる理神の名號を稱へるのは雲泥の相違があります。勿論、理神の名號を稱へることは何等の功德なしといふものではありません。幕末の頃、尾州八事山の僧が念佛の神通力といふやうなものを木版二冊物に編輯したものがあつて、念佛のみで種々の靈妙な現象が起つた例を詳細に述べてあつたやうであります。又た徳川家康は毎日何萬回とかの念佛を稱へることを日課として居たもので、此の鎮魂法ありて彼れは四面激動の中を悠々と進退し得たのだといふ説もあります。果してそんな事實があつたかどうか存じませんが頗る面白い話だと思ひます。

七、稱名念佛と阿彌陀佛の由來

念佛といつても専門學者の説では随分八釜しい議論のあるものではありませんが、善導大師が彌陀の十八願を釋するに殊更に稱我名字といふ四字を加へて以來稱名念佛の流儀に解する人が多く

なりましたが、まあ門外漢の吾々が彼れ此れ詮議立てするにも及びますまい。

阿彌陀佛の由來に就ては歐洲の學者中には波斯のゾロアスターの思想が混入したものと考證する人もあり、ドクトル萩原雲來氏の如きは古代印度の神毘濕摩から出て來た思想上の産物のやうに申され、その他にも異論が行はれ、歸一するところがありません。昔から顯教でいふところの阿彌陀佛、及び密教流の阿彌陀佛についても既に幾多の論述がありますが、要するに一つの理想上の神に外ならぬものであります。かくの如き理神を信念し、または其の名號を稱へてさへも古來幾多の神祕的現象を演出して居ります。その靈妙なることは唯心の淨土、己身の彌陀を振り廻す安悟り連の思ひも及ばぬところのものであります。然るに天照大御神様は斯かる理神に非ずして活ける實神であらせられ、神化不測の大神靈で、言説を以て此の大神の輪廓を髣髴せしめることは出来ないことではありますが、強ひて申せば……。」

客「一寸待つて下さい。あなたは先刻から實神とか理神とか申されますが、總て神なるものは理神でなければ、或る偉人とか、功績のあつた人を神格化して言つて居るのではないのですか？いかあなたに神化不測の大神の實在を強調されたとして、現代人の多くがその儘受け入れるでありませうか。」

天照大御神を崇敬するといふのも要するに太陽崇拜思想に由来するもので日本のみならず世界の各地に於て色々な形式で行はれてゐたものではありませんか。このことは本居宣長翁の如きが太陽を以て直ちに天照大御神なりと論断せられて居るのでも解ります。又た我國の神道學者で神道の教科書の様なものを書いて居られる某文學博士などもあなたの方のやうな頑固な神道家を警しめるために『世の神道を説くもの深く思ひを茲に致し、人をして此の大御神を崇拜信仰せしむるに當り、古代に行はれたる太陽の神話的崇拜を今日に強ふるが如きことなきを注意せざるべからず。』と明記して居られますが、尤もなことだと思ひます。」

八、天照大御神は實在神

對「なにが尤もなものですか。本居翁が太陽を以て直ちに天祖也と断ぜられたのは誤りでありますが、これはまあ害の少い方で、沼田順義の如きは『天照大御神は我が皇室の御先祖で仁愛の御方で、その御徳の高大な爲めに、何時とはなしに未開時代の太陽崇拜神話と結びつけて考へられるやうになつたのである。』といふ風に説いて居ります。平たく言へば天照大御神は昔の未開時代のえらい婦人であつたと説いて居るのであります。まことに言語道断、不敬至極であります。今

日の神職、神道學者の意見なるものも大體に於て同様でありまして、彼等は普通の人間以外に一切、神靈なるものを認めようといたしませぬ。中には陰かに胸の内には何となく超人的の威靈の實在を臆けながら信じながらも此れを人に語ることを愧ぢ、講演に出かけても決してさういふことを口にしないのであります。また、さも勿體らしく神徳を吹聴する輩は神社收入を多からしめんがため——即ち商賣上から誇大な喧傳をして賽客を釣つて居るので、勿論こんな乞食神職は神祇の實在などは御本人が始めから信じて居ないので、神國日本としてはこれほどの罪けがれはない譯で、私どもが狂と呼ばれ愚と嘲られつゝも微力をも顧みず、この一大危機に臨んで嘔心吐血して努力せねばならぬ理由があるので。」

客「では一たい實在の天照大御神様とはどんな神様ですか。」

對「私は日本人たるあなたに天照大御神様とは如何なる神にましますかといふことを申し上げなければならぬことを遺憾といたします。詳しいことは此の次に申し上げますけれども、申す迄もなく伊弉諾の神の御子で我が皇室の宗祖であらせられ、最高神界たる高天原の主であらせられ、太陽系を治し給ふ大神であらせられます。強ひて申せば氣化の神であると同時に、胎化の神で至清、至明、至仁、至愛、至善、至美の生命の神様であらせられまして、太陽がよく此の大神

の神徳を表現して居りますが、先刻一言いたしました如く太陽は天照大御神様ではないので、大神は天文学上では瓦斯球たる太陽神界の中に現に鎮まり給ふのであります。」

九、理神の名を稱へて何故靈驗が現はれるか

客「あの火の玉のやうな太陽の中に實神たる 天照大神が鎮まり給ふといふことは聊か、承認し難いお話ですが、それは此の次に拜聴するとしまして、少し話が後戻るやうであります、實神ならざる理神たる如來の名號を稱へて色々の靈驗なるものが實際にあることはあなたも否定されないやうですが、あれは一體どうしたのでせう。かうなると如來も實在するといふことを如實に信じなければならぬやうです。」

對「御尤もな話であります。阿彌陀如來とか大日如來とかが實在しない事は私共よりも本職の坊さん方が既に／＼申して居ることでありませけれども、愚夫愚婦のためにも伽藍の裝飾のためにも木佛や金佛を備へなければ末世の衆生を濟度することが出来ないやうになりました。徹見した坊さんには木佛を焚いて尻をあぶつたのさへあります、併しそれは達人のことで、多數の佛敎信者は相恰圓滿光明遍照の如來が實在するものと信じて居り、また阿彌陀經にも

『若し善男子、善女人有りて阿彌陀佛を説くを聞きて名號を執持すること若は一日若は二日……若は七日一心不亂ならん。その人命終る時に臨みて阿彌陀佛諸々の聖衆と與にその前に現在し給ふ……』

また觀無量壽經には

『汝若し念すること能はずば、應に無量壽佛を稱すべし、是の如く至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せん、佛名を稱するが故に念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除き、命終の時金蓮華の猶し、日輪の如くにして其の人の前に住するを見ん。』

とありますから阿彌陀佛の名號を稱へることは少しも不思議ではありませんが、をかしいのは南無妙法蓮華經のお題目です。」

客「お題目が何がをかしいものですか。諸經第一の法華經に歸命するといふのは少しもをかしくありません。」

對「字義や理窟はさうでせうが、それならどうしてあれほど熱烈に題目なるものを唱へなければならぬか、思想なり行爲なりに於て法華經に歸命して居ればよい筈でなにも書物の題愈を唱へなくてもよいではありませんか。」

客「お題目を書物の名と言はるれば、なるほどそれに違ひありませんけれども、それには門外の徒の窺ひ得ざる哲理もあることでありまして、實際問題として之を稱へることによつて幾多の神驗奇瑞が現はれ、それで益々熱心に修唱して居るのが日蓮宗の現狀であります。」

對「そこです。理想神の名號を稱へてもそこに靈妙な現象が起り、また書籍の名を連唱しても奇瑞が現はれるから世の中は厄介に出来て居ります。それは如何なる譯であるかと申しますと……靈學の豫備知識のないあなたに今これを申上げても分りにくいと思ひます共、それはあらためて後日申上げるとして、今日は簡單に申上げて置ませう。」

世界一切の萬物が不生不滅不増不減なることは今日では何人も認めて居ります、又た人間其他の生物の靈魂なるものが不滅なることは古來肯定され、又は否定されて居りますけれども、これは人間の思想や論議によつて左右されるものでなく、靈魂の存在は儼たる事實の問題であります。これを一應納得していたらかなければ此の話は進められないのであります。

十、宇宙は音と數との交錯・數を重ねるここの秘義

それから此の宇宙は音と數との交錯であります。此の事も解説を要しますけれどもそれもお預

りとして、此の數といふものに神祕があり、その數を重ねるといふことにも重大なる秘義があります。俗に謂ふお百度参り、念佛百萬遍とか光明眞言二十一べんとか或ひは團扇太鼓の破れる迄とか……凡て稱名は成るべく數多く稱へることになつて居ります。同じことを繰り返すことは事と物との一切に應驗のあることであります、同じ言葉を繰り返すことによつて此處に靈界と幽界との間に一つの途が開かれました、既に歸幽した人靈とか狐靈とか犬狸天狗の類で浮浪して居るものが作用して來るのであります。つまり同一の言葉を繰り返して修唱する人に宇宙のルンペン靈が憑依するので、こゝに物理化學の法則を無視した現象が起つたりして、一寸した病氣を癒したり、くだらぬ豫言を始めたりするのであります。」

客「私も神様とか妙見とか稻荷とか不動とか稱して門戸を張つて居る連中を二三知らぬでもありませんが豫言的中するものもあり、しないものもあり、中には遠方のことを誤りなく指摘するものがあります、あれ等は總てさういふ修法によつて或る靈が來格するやうになつたのですか。」

對「いや、さういふ譯ではありません。なにもしなくても憑依する人もあり、斷食水行によつて之を求めるものもありますが、同じことを繰り返して稱へてもさういふ結果が起るといつたまでです。若し嘘だと思はれるなら阿彌陀佛の名でも書籍の名でも大師の名でも山に行つて専心に稱へ

て頼んで御覽なさい、應揚箭の如しです。

南無大師遍照金剛や、南無妙法蓮華經の連唱によつて靈的現象を多少なりとも體驗して居る人は相當にある筈で、念佛の如きも、ねんね唄の節のやうにやらす力を入れて専心にやれば同様の現象が起ります。現にそれで一派を立て居るのが某所にあります。しかしこれは同じ言葉を繰り返すといふことに秘密があるので唱へる言葉は他の經文の名を稱へても——勿論既成教團のそののやうに都合よくは參らぬにしても——同じ現象が起ります。勿論靈的現象と申しましてその幽なると顯なるとありまして、幽なるものは首を振つたり奇聲を發したりはいたしませぬ。」

十一、『十言の神咒』は妖魔撃攘の祕唱

客「それでは十言の神咒を奉唱してもさういふ現象が起りはいたしませぬか。」

對「いや、それは絶対にありませぬ。自覺的には寧ろ張合がない位に起りませぬ。それはないのが當然であります。相手もないのに何か言あげして居れば正に狂氣の沙汰でルンペン先生ならずとも擣撃つて見る氣にならうではありませんか。十言の神咒は宇宙一切を治しめす大神に呼びかけ、同時に天地八百萬神に呼びかける至重至大の修法でありますから、これを修唱する事によ

つて諸神との間に氣線を生じ、妖魔邪靈の窺ひ寄る隙はないのであります。

それどころか、十言の神咒は低級なる邪靈の最も懼るゝ所で此れは實驗に徴して明らかであります。靈的原因による疾病、又は普通の病氣、その他祈願の場合には患者に對し又はその寫眞、所持物に對して奉唱するのであります。その神驗の適確にして迅速なものにはたゞ驚くの外はありません。その靈驗記録も澤山御座いますけれども、修法は至平至易でありますから、自ら修して神徳を蒙られるのが近道でせう。」

客「どうして實在神の御名をもつて呼びかけるだけでさういふ靈驗があるものでせう。」

對「神咒は大祕言の一つでありますから、これを奉唱すれば神様は應驗を垂れられなければならぬ筈のもので、これは神と人との約束に基くものであります。古傳の神法にしても或る所定の方式によつて、祈願すれば神祇は必ず之に應じ給ふもので、至誠のみを以て神威の御發動を拜することは不可能ではないが容易でない事情は茲にあるのであります。」

十二、神名の祕義

神名の祕義といふことについては

ハッドン（ケンブリッジ大學の民族學擔任教授）の書いたものの中に

神祇の祕せられた眞實の名を知る人が、其の神名を口に發する時は我が身體を隨所に出沒せしめ、或ひは敵を殺活する能力を得るのみならず種々の奇蹟をも發現す。

と言つて居るのは古傳雲間の片鱗を窺知し得た物の言ひ方であります。宇宙の祕義はまことに簡單平易な方法によつて存在するものであります。彼れは其處にユダヤの傳説を引いて居ります。——アダムの第一夫人たるリリスがアダムに反抗して逃走するとき、リリスは『シエム、ハムフオーラシユ』と申しました。即ち滅多に口にしてはならないところのエホバの祕名を唱へて、『人形の家』を飛出したのであります。この言靈は忽ち非常な神祕な力をリリスに加へたので、エホバでさへも此の新らしい女の元祖には手を焼いて甚だしく神様の估券を引き下げました。リリスを追跡した三人の天使もリリスと妥協する程度以上にはどうすることも出来なかつたといふのであります。

客「これで大體了解いたしました。が、神咒修誦上の心得ともいふべきものを伺ひたいものです。」

對「たゞアマテラスオホミカミの十言を至心に奉唱すれば宜しいので、聲の緩急大小はその人の便宜に従はれて差支へありません。尤も、正しい念誦の形式は天行居の道場で傳へて居りますけれ

ども、必ずしも道場でその傳を受けなければならぬといふ譯のものではありません。

客「あなたは日々常時これを奉唱せよと申されますが、何時もやつて居られるのですか。」

對「必要な場合は山口大人の申される如く何時でも奉唱いたしますが、普通の時は何等かの業務を執つて居りますから、まあ『結靈の時』と夜の八時といふことにして居ります。」

客「その『結靈の時』といふのは何ですか。」

十三、『結靈の時』

對「『結靈の時』と申しますのは私共同志一統が、君國の一大事に貢獻するために靈的に結合する時であります。これは昭和五年六月一日に制定されたものであります。毎日正午から三分間だけ特に同志一統のものが心を純一にして十言の神咒を默唱するのであります。鐵を取つて田園に立つ者も、十露盤を握つて店頭に座する者も炊事場で働く者も官衙で勤務する者も、千里一堂に在るが如く心を一にして、天照大御神様に感應道交することを必行するのであります。この一事を以てしても是非とも幽顯兩界の岩戸開きを實現するといふ決意を以て、これを修するのであります。」

客「その祈る心は？」
對「申す迄もなく」

- 一、皇室の御安泰彌榮のために祈り
- 二、國力の充實國威の發揚のために祈り
- 三、幽顯全世界の生類が正義に反省歸順せんがために祈り
- 四、同志相互の清潔なる幸福のために祈る

のであります。事情の許す人は正午になりましたら右の四箇條を先づ微音で讀み又は黙誦して後に十言の神咒を默唱して頂くのであります。數ヶ月續けて後は右の四ヶ條を音誦せず、直ちに十言の神咒を默誦しても産靈紋理の力によつて祈念の目的は立派に達するもので、そこが心靈の働きの靈妙幽玄を極めるところであります。斷金の友といふのは借金を斷る友人のことではありません——易經に金といふのは皆鐵のことと二人心を同じうすれば其の利、鐵をも斷つべしといふのであります。鐵どころか金剛石でもモット堅いものでも貫かざる無しであります。二人よりも十人、十人よりも百人、至心感應の同志が多ければ多いだけその驚くべき威力を發揮することになるのであります。

古代の哲人も、多數の人が欲求を專一にすれば、天地もそれに從ふといふことを明言して居ります。書經には『民ノ欲スル所天必ず之ニ從フ』と曰ひ荀子も『衆ヲ得レバ天ヲ動かス』と嗟嘆して居ります。しかし幾十萬幾百萬の信徒があつても烏合の衆では駄目であります。眞劍の同志があつて、しかも其の信を同じうする對象が正しい眞理でなければ天地は感應道交いたしません。

客「正午から三分間と申しましたもそれも困難な事情の人もありませうし、それに都會などはサイレンとか汽笛とかがありました比較的に正確にまゐりませうが、田舎の時計などは出鱈目ですから僅か三分間では千里一堂に會する結靈の目的に遠ざかりはいたしませんか。」

對「來客と應酬中の人などは、一寸閉目して十言の神咒を三回默誦されるだけで宜しいので、それ位ならば客に奇異の感じを與へないでも濟むと思ひますが、それはさういふ特別の場合に限りませんので、なるべく三分間は實行して頂きたいのであります。」

次に時計の問題はあまりむづかしく考へられないでも、なるべく正確な時計に合せて置かれるばよろしいのであります。海外に住居せられる人は時差を計算して置かれて、内地の正午に奉唱されるばよいのであります。同じ時刻に同じ心で修法するといふ本當の赤心がありますれば、

實際の時間が少々前後してゐても相互に必ず感應することは斷じて不安はありません。それから修法の際には遠方の同志も地上の距離を念頭に置かず、みな一堂に在りといふことを覺悟して修して頂かねばなりません。楞嚴經に『十方虚空自他毫端を隔てず、三世古今當念を離れず』といふ文句がありますが、正にその通りで、その呼吸が大切であります。

十四、『結靈の時』の靈験

客「結靈の時間が制定されてからの實際の靈験といふやうなものはどうなつてゐますか。」

對「先づ昭和五年當時の日本と今日の日本とを比較してみられるとよいと思ひますけれども、それは神と人との総合的努力の結果として置いて、個々の同志について申しますならば、治病上に於て、逆境の打開に於て幾多の神祕な體驗に畏れ入つた人々が續々と歡喜の報告を寄せて居られるのを見ても分ります。中には少々神祕に過ぎると思はれる報告もありますけれども眞劍にやれば直ちに自在に百靈萬神に感合し得る大法でありますから、機縁ある人が其の感合を自覺するとは少しも不思議ではありません。

感合を自覺し得ぬ人は感應はないものと即斷したがりませんが、さうではありません。一心

客「結靈の時の十言の神呪は黙誦に限るのですか。」

對「さうではありません。これは正午頃は普通の人は何等かの仕事をしてをられるとか、又は人と立交つて居られるとかでありますから、便宜上黙誦としてありますけれども、私などは自宅に居るときは神前でその時の事情によつて、三分間と限らず五分間或ひは十分間奉唱して居ります。」

十五、八百萬神の神呪奉唱

に新聞を讀んで居る間は机上の時計がセコンドを刻む音は聴えませぬけれども、その間時計は休止して居る譯でなく、前後の分ちなくチタタクと鳴つて居ります。極端に言ふと人は四六時中宇宙間の神靈と感合して居りながら、大部分の人はこれを自覺しては居りません如く、神呪の修唱に於ても神異現象がなくても少しも差支へありません。少し婆心が過ぎるかも知れませんが、神道仙道の經典中には面白い文句が随分散らばつて居るもので、玉女隱微には

人は氣中ニ存ス、此氣則チ四大ノ眞氣ニシテ生靈ノ依ル所也、天地間萬物の生靈此ノ氣中ニ充滿ス、此ノ故ニ感ヲ以テスレバ萬物應ゼザル無シ

と直言して居ります。此の一句をよく考へていたゞきたいのであります。」

客「結靈の時を正午と定められたのは人間生活の實際上の便宜を考へられて天行居で決定されたのですか、それとも神示によるものですか。」

對「正午が總ての人にとつて必ずしも便利だとは限りません。實際の便宜から言へば朝の拜神の時などがよいのではないかと考へられますが……この事は初心の貴方には少し分りにくい事と思ひますが現に神界に於かせられても八百萬の神々が人間界と同時に十言の神呪を奉唱して居られるのでありますから他に重大なる秘義のある事は勿論であります。」

客「神様が十言の神呪を奉唱なさるとは？」

對「これは餘り申上げたくないことではありますが實は『結靈の時』制定が、人間界に於て決定されました昭和五年五月三十一日、突如として地の神界大都たる神集岳の大永宮から發令せられて八百萬の神祇も毎日同時刻に天照大神の大神名をお唱へになる事になりました由で大神界未曾有の盛事とも申すべきものかと恐懼して居る次第であります。これは神界に於かせられて『結靈の時』の修業を深く感應遊ばされて、發令されたものと拜察いたしますが、このことに就ては先刻引用いたしました書經、荀子の文句を常に念頭に置かれて修法、研究を重ねて行かれる中には何も彼も神ながらに明瞭となる時節が参ります。」

とにかく、何人を問はず一人でも多くの人を此の『結靈の時』に参加させなければなりませんので、こればかりは世の中が如何に變化しても續行すべきことであり、人間歸幽後も無論引續いて修業しなければならぬものであります。

十六、全國同志の神呪奉唱

十言の神呪を修唱するにも、なるべく人員の多い方が宜しいのであります。人員が多ければ恰も蠟燭の灯を澤山に並べ立てるやうなもので、相照し合つて一本々々の光りも一層あかるくなるのと同じことでもあります。既に申しました如く世の中が非常な大時節——所謂非常時に入るべきことを豫見して、此の至平至易なる大法が公開されたのでありますから、全國の學校や軍隊、青年團、處女會、修養團體などでも是非共此の神呪を奉唱して頂きたいのであります。現に私どもの方の大阪、京都、神戸、名古屋等の支部では、廣田神社や熱田神宮の大前で時々『十言の神呪奉唱會』を催して一般人士の参加奉唱を勸説して居るやうな譯で、これは天行居の廣告や宣傳のために言ふのではなく、直接には日本國のため間接には世界人類のためでありますから、日本國民として是非やつていたゞきたいのであります。青年子女團體なり、修養團體なりが日頃基督教

的或ひは佛教的精神指導を受けて居るにしましても、日本人の團體ならば此の天祖の大御名を奉唱することは、君ヶ代の奉唱と同じく少しも不自然ではなく、寧ろ日本人の誇りでなければならぬと思ひます。」

客「つまり日本國民は信仰に於ては、天照大御神を耶蘇、佛陀、アラアを超越して崇敬し、念佛、題目に超越して天祖の大御名を稱へよといふことになりませぬ。さうするとその中に『十言の神呪』は此處が本場だ」といふやうなものが各所に現れるかも知れませぬね。」

對「それで結構であります。私共はそんなケチ臭い考へは少しも持ち合せて居りませんのです。神呪の修唱を八益しく同志に申し又た年來天下に勤めて居るのは天行居であります。既に中上げませられ、山口起業大人の熱心に力説せられたのみならず東京の或る女學校でも奉唱して居るとか聞いて居ります。その學校ではどういふ傳により如何なる動機で始められたかは存じませんが、まことにめでたい事でありませぬ。近頃は小學校の一隅に小さな神社を見かける事がありますが實に結構なことで、私共も懇意な學校當局者に此のことを熱心に説いて居ります。共、映畫とか舞踊とかやれスポーツとかに熱心な餘りか、此の問題に就ては極めて冷淡なやうであります。こ

れは文部省が眞先に提唱し、各市町村が之に應じて神社を建設し、その大前で神呪を奉唱するこ
とにならなければならぬと思ひます。」

十七、『十言の神呪』は小學校より

客「學校神社のことに就て思ひ出しましたが、『命』第五卷七月號に千家尊建氏は次のやうに述べ
て居られますが、至極同感だと思ひます。」

『學校教育の中心は、御眞影と教育勅語とにあること言を俟たないであらう。だが近頃は學校
教育は智慧のある悪人を作る憂ひがあるといふところから、其處に信仰的なものを加へねばな
らないと識者は心配して居る。しかし今更既成宗教の信條を學校に入れる事は出来ないし、難
點はこゝにある。何故なら既成宗教は現實と遊離して居るところがあつて、完全に現實的でな
いのに學校教育は完全に現實的であるべく要求されるからである。尤も既成宗教の一切は排斥
されるものでなく、その祖師等の言行はよつて以て學生、生徒、兒童等の宗教心開發の材料に
なり得るであらうから、修身、讀本等にそれ等を加へる事はあながち捨て去らるべきものでも
なからうと思ふ。だがこれ等を學校教育の根本にする事の出来ないのは分り切つた事であるの

だから、私は新に御眞影の背後に 天照大神様をお祀りし 天皇陛下がその御延長である現神である事を表現し、最敬禮の代りに拍手を以てし信仰教育に資しなくてはならぬと思ふ。そして教育勅語も神道的な立場からもつと深く解釋説明して教授しなくてはならぬ。こゝに宗教ならぬ宗教の信仰教育が自ら行はるゝわけである。識者がこの考へを考慮せられむことを望む」

對「他の部分に互つては意見もありませんが、御眞影の背後に 天照大御神をお祀りして 天皇陛下がその御延長——御表現にまします事を知らしめるといふことには大賛成であります。それは信仰教育に資するといふやうなことでなく、陛下が天祖の現界的の御表現にましますことを知らしめて敬拜せしめること自體が教育の本源であると思ふからであります。そして天照大御神様のみならず幽冥の主宰神に坐す大國主命様——これは千家さんの代辯をしてあげる意味で云ふのはありません——土地の産土大神又た文教の神様を配祀し其の大前で拍手して全生徒教職員がアマテラスオホミカミの十言の神咒を奉唱するやうになりましたならば、奉唱者が道俗公私大小一切の問題について驚くべき神徳を蒙ることは勿論、神咒の威力は宇宙に遍満し、そればかりでも世界の岩戸は開け、大日本天皇陛下の御稜威は全世界を光被するに至るのであります。」

十八、非常時局と『十言の神咒』

客「夜の八時の神咒奉唱は何ういふ意味のものですか。」

對「それは現在の複雑にして微妙なる時局に關係のあるものであります。天祖の大御名を奉唱するといふことは最尊最貴の大神に呼びかけると共に八百萬神に呼びかけて（日本の神道は一元的多神教ともいふべきものですから）その神威の發動を祈るのであります。天地八百萬神の神威の發動によつて——人間の努力の必要なることは申す迄もありません——世界の時局を天の岩戸開きに有利に展開せんとするものであります。ちやうど八時になつたやうですから一緒に十言の神咒を奉唱いたしませう。」

主客共に口を滌ぎ手を洗ひて神前に坐す。

對「アマテラスオホミカミ、アマテラスオホミカミ……。」

客「……………」

對「何方でも始めの間は聲を出して奉唱することは要領の悪いものですが少し慣れるとなんでもありません。數をたのむといふのは卑怯なやうですがこれからは同志の多數參集する支部へ御いで

になつて一緒に奉唱さるれば發聲の皮切りは雑作ありません。それから後は隨時隨所で、しかしなるべく神前で、奉唱していただきたいと思ひます。先刻も申しました如く十言の神呪は天祖の大御名で同時に總ての神様に歸命する言葉でありますから、何神様の前で奉唱せられても少しも差支へなく、神々様は天の斑駒の耳振立て、美しく聞し召すのであります。」

客「よく分りました。これからは十言の神呪を修唱して眞の日本人としての歡喜に浸りたいと思ひます。有難う御座いました。」

十言の神呪 終

昭和九年十一月九日 刷
昭和九年十一月十二日 發行
昭和十年七月三日 再版發行

天行居パンフレット叢書
第二輯

價定 金 拾 錢

山口縣田布施町大字寶前三丁目番地

發行兼印刷人 益野倍太郎

山口縣田布施町石城山麓

發行所 神道天行居

振替大阪六六六三七番
電話田布施九番

不許
復製

神仙の秘區・人類信仰の家郷

石城山と天行居

◎忠肝義膽の覺成道場・天行居とは？

目次

- 一、非常・闇黒・不安時代
- 二、闇黒の聖火・天行居の出現
- 三、天行居の學統とその先達
- 四、地上一系唯一の太古神法
- 五、神靈・神寶の頻々たる降下
- 六、神仙の秘區石城山
- 七、天行居出現の使命
- 八、神なる大日本天皇
- 九、天關打開―地上大修禊と大日本天皇
- 一〇、天關打開と天行神軍及び其の使命
- 一一、人類歸幽後の世界
- 一二、修齋會と神法の相傳
- 一三、神道天行居の組織
- 一四、結縁の手續

◎天行居總出版物の綜合的縮刷版

◎本書出でて大小の群魔悉く戰慄す!!

友清歡眞先生著 神道天行居藏版

忽ち 靈學筌蹄

普及版 四六版三〇八頁
定價金八拾錢
(送料共)

本書は著者が一大覺悟を以て某靈山に參籠し、深齋して筆を執り直接に神示を仰ぎつゝ、稿を纏めたるものにして、古傳の五大神法の解説を主流とする神道靈學の入門書である。内容は神道靈學の目的―宗源―神とは何ぞや―運命とは何か等に就て詳述し、鎮魂法―歸神法―音靈法―名靈法―神卜法を講じ、世の低級にしてインチキ極まる俗靈術の徒をして顔色なからしめて居るのみならず、本書は實にそれ等俗流靈術家の秘密の寶典として尊重されて居る程で靈學研究家必讀の書である。

目次

- 序論……靈學の宗源―靈學研究法に就て
- 神靈と人……神とは何ぞや―神界から借金等
- 神機と運命……運命とは何ぞや―運命改造法外
- 鎮魂法……鎮魂の修法―鎮魂と治病―九字外
- 歸神法……歸神の實例―憑靈の區別―石筌等
- 音靈法……音靈法とは何か―修業の方法等
- 名靈法……所謂姓名判斷の迷蒙と名靈の神祕
- 神卜法……卜は神事の宗源―元數盤の大發見
- 結語。附録。本田親徳翁遺稿註譯。

◎邪靈邪法を弄する者顔色なし!!

◎神道靈學の奧義講傳・神扉開顯の祕鍵！

『靈學筌蹄』の姉妹篇 神道天行居藏版

重版
重版
又重版

天行林

普及版
四六版四二四頁
定價壹圓參拾錢
(送料共)

全篇干支十二林二十二章に分ち、靈魂及び物質の本質に筆を起し、死とは何ぞや、死後は如何に死者と生者との關係に神界と死者の靈魂との交渉に就て具體的に解説し、進んで靈魂歸神の極秘事について前代未聞の眞理を闡明し、自他の靈的治病法について類例なき秘訣を大膽に公開して何人にも直ちに實行するを得しめ、又た甲州流軍學の秘卷―乙中甲大に神傳の天地御柱傳を講じ、音靈法を細説し、靈的見地よりする『日本神國論』に至りては著者の忠魂紙上に躍動するを見る。更ら

に惟神の道に就ては靈的見地より縦論横説し以て、一毫の疑義なからしめ、神國民としての眞の安心立命の住所を指示し來るべき世界の眞の變動に關して其の内容を發表し、又た元數盤の秘義を説き元數盤より周流發展せる年靈盤(神名木車)の圖を添附して研究上の遺憾なからしめんことを期して居る。本書は『靈學筌蹄』の姉妹篇にして神道靈學の奧傳書なれども『身を以て國難に當らん』といふ盡忠報國の精神全卷を貫き、天行居の靈的國防の萌芽は既に本書に於て此れを見ることのできるのである。

◎神傳秘笈の開放・神通自在の祕卷！

◎天皇神聖の本義・本書に於て始めて完し!!!

無方齋先生講述 神道天行居藏版

初版
再賣版

古神道秘説

並製
四六版四五〇頁
定價壹圓七拾錢
(送料共)

本書は友清無方齋先生の講傳を結集したもので、靈的見地から敬神尊皇の大義を光宣し、前人の曾て夢想だにせざる正しき神傳の『神ながらの道』を人類の使用する文字によつて表現せられたもので、神人の關係、神國日本の由來、生死の秘機、靈魂の出自歸着、顯界と幽界との交渉、所謂人類世界の立替へ立直し、修道の正邪、神法卜占等縦論横説到らざるなく、和漢古今の聖賢、東西の經典全卷に登場して而も整然と活動し遂に天祖、天皇の御稜威に攝取せられる莊嚴は讀者をして眞の

宇宙の大道に引入せずんばやまざる天下稀有の名著である。殊に『大日本天皇は天祖の人間世界に於ける御表現なり』と斷ずるあたりの、紙上の文字は悉く光明を放ちて四海を照らすの概あり。而して『天行居夜話』九篇は對話體を以て書かれ最も親しみ易く、章を追うて進めば眼界漸く開け、山川草木次第に新たなるを覺ゆるであらう。卷末『異境備忘録』は宮地堅磐先生の正神界出入の手記で斯界に一大センセーションを捲き起した秘録である。殘本少數。

◎異境備忘録により神界の實相始めて明瞭!!!

◎見よ！神霧を闢いて光宣せらる天啓の大思想を

氣玉彦先生著 神道天行居藏版

初版賣切
再版近刊

神界の經綸と天行居の出現

最上クローズ装釘
菊版約七五〇頁
定價金貳圓五拾錢
(送料共)

本書は石城山道場開設以後に於ける氣玉彦先生の講述を輯載したもので、神儒佛耶回その他諸々大小幾百千の宗教又は靈團の異動を超越し、日本臣民たる者の齊しく心を空しうして必讀すべき金文字を以て満たされて居る。今は抑も如何なる秋である乎。世界の生きとし活ける者は如何なる立場に置かれて居るのである乎。明日の世界は如何乎。明後日の地上の生類は如何乎。これら、人類の大小公私一切の疑問に應答すべく天神地祇

の訶護幽贊によつて天地間に出でたものこそ本書である。國と國とは深刻に戦ひ地上は水火によつて徹底的に清めらるべし。而して顯幽兩界の主宰神に坐す。天祖の御正流大日本天皇陛下の世界君臨を如實に仰ぐべし。これ荒誕無稽の囂語に非ずして世界人類必到の運命である。本書は神示を中心に縦横の靈筆を揮ひ、日本忠道を説いては儒夫を立たしめ、靈魂の歸趨を示しては人類の安心を確立せしむ。正に天下第一の書である。

◎日本天皇世界光臨・世界の大機は近づけり！

■神々の恩寵 ■神傳祕事の相傳！
■神界の經綸 ■神仙の祕區闡かる！

天行居修齋會

期間七日間
會費金拾圓
(舍費食費共)

修齋會 〓に就ては第一輯『石城山と天行居』中の「修齋會と神法の相傳」参照のこと
場 所 〓神道天行居石城山道場
期 間 〓毎月六日より十二日迄七日間
但し五月及び十一月は廿一日より廿七日迄

參加資格 〓神道天行居同志(男女を問はず)
行 事 〓神府との結縁、修法指導、傳法其の他

右修齋會に參加希望の同志は郵便を以て照會せられ修道部の承諾通知を得られたる方に限り遅くとも開會前日迄に道場に到着出来るやう出發せられたし。

■同志の光榮 ■神集岳の現界的齋庭との結縁
人類の福音 ■靈的國防軍士官學校開かる

355
1039

終

